

# 大分県産業科学技術センターニュース

Oita Industrial Research Institute

<http://www.oita-ri.go.jp/>

- 成果紹介 ----- 1-2
  - 「竹のビンテージ復刻版」の開発
- 派遣報告 ----- 3-4
  - インド・トリプラ州森林環境改善・貧困削減事業における大分県と国際協力銀行との連携

- 事業紹介・報告 ----- 6-8
  - 大分県知的所有権センターと社団法人発明協会
  - 平成 19 年度九州・沖縄地域食品・流通・加工関係研究会の開催
  - 科学技術フェア 2007 の開催
  - 県政ふれあいトーク
  - 次世代電磁力応用機器開発拠点の構築に向けて

## 成果紹介

### 「竹のビンテージ復刻版」の開発 (企業ニーズ型共同研究事業)

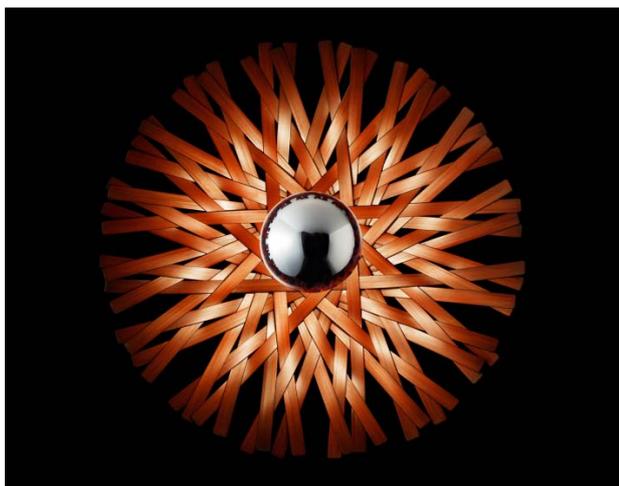


図1 試作品 アプテニア (デザイン:城谷耕生氏)

#### 1. はじめに

現在、別府竹工芸の産地は他の工芸産地同様、安価な海外製品の流入やデザインの遅れ、徒弟制度という養成システムが崩壊したことによる後継者難など多くの問題を抱えています。

BAICAは別府地域で活動する若い竹工芸従事者たちが、「自発的に労働と技術・デザイン・経済の学習の場を作り出す、新しい工房運営プロジェクト」の実現をめざして結成された開発研究販売グループで、大分県の県花である豊後梅の花「梅花」から名称を付けました。

その手始めの商品開発では、竹工芸・訓練支援センター(旧別府産業工芸試験所)の過去約40年に渡って蓄積された膨大な開発デザインからマーケットニーズ



図2 別府の地獄蒸しでアプテニアを製作

に合うデザインを選定し、それをリ・デザインにより、復刻することとし、BAICAはそのプロセスで高度なデザイン力および技術力を吸収しレベルアップを図り、現在一過性の特注品が多い現在、「普遍的価値」に留意した定番商品の開発を進めました。また、外部デザイナーの協力によってオリジナルデザインも含まれることになり、製品ラインナップに厚みが増しました。

#### 2. 内容

開発の問題点は、復刻するデザインが選定者の個人的好みではなくマーケットニーズに合うかどうかで選定されること、またリ・デザインも同じ考え方で行われることが成否を分ける重要なポイントです。個人的な好みにも左右されないためには、検討方針の吟味と実際に流通に身を置いているマーケットニーズに詳しい専門家の意見を

取り入れることが有効で、今回はそれが可能でした。

もし開発予算が少なく、専門家の意見を聞けない場合は、「デザイン開発プロセス」に沿って開発を行うことが有効で、特に「市場と消費者のニーズ情報」を収集し検討すること、「ターゲット(購入想定者)の設定」の具体的認識を徹底させることにより、自分の好みを越えた検討が可能となります。

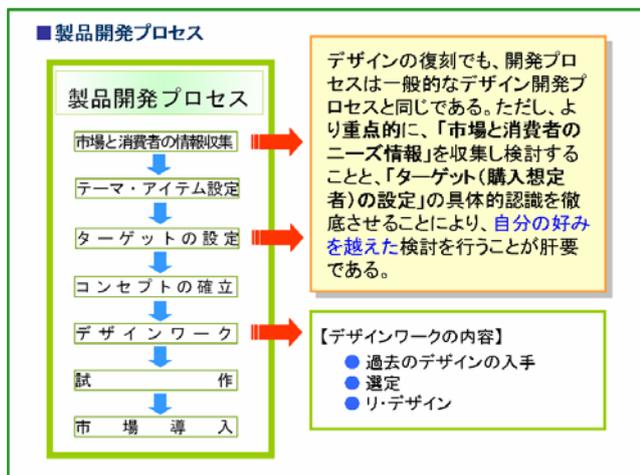


図3 製品開発プロセスとポイント

今回は、検討方針として、対象となるターゲットを、欧米の先進的デザインであるイタリアモダンに代表される都会的インテリアを好む人々で、自然素材に関心のある30代以上の富裕層を想定しました。



図4 ターゲットイメージシート

また、開発の基本コンセプトは下記のとおりです。

普遍的価値を持つ竹製品を開発する。

●数十年という長い年月の間、市場に出続けることができるもの作りを、素材・技術・デザインなど様々な面から判断していく。

●過去にデザインされたもので、現在でも全くその価値を失っていないもの、つまり普遍的価値を内在するものを選定し復刻する。

●新しい素材や別の伝統技術に置き換えることにより、

単なる復刻にとどまらない、普遍的価値をさらに磨いた新しいものとして現代に甦らせる。



図5 開発した試作品（撮影：久高良治）

### 3. 販路開拓

開発が一段落した後、今年度は販路開拓に力を注ぐこととなります。これが開発以上に労力と知恵が必要となり、苦勞するところです。

現在、客員研究員であるデザイナー城谷耕生氏のご協力により、各方面に売り込みを行っています。

10月16日～21日に大分市アートプラザで、BAICAと日本文理大学近藤研究室と共同で展示会を開催しました。BAICAのプロダクト製品を展示し、同時に新しい竹の使い方として竹の仮設構造体を提案しました。



### 4. 終わりに

BAICAの活動が若手竹工芸従事者の育成に役立ち、別府竹工芸産業の振興につながることを期待しています。

今回の開発は、産業科学技術センターの企業支援メニュー「企業ニーズ型共同研究事業」を活用しました。各種開発を計画されている企業は、ぜひご利用ください。

(竹工芸センター 坂本晃 sakamoto@oita-ri.go.jp)

## インド・トリプラ州森林環境改善・貧困削減事業における大分県と国際協力銀行との連携

### 1. はじめに

現在、国際協力銀行（JBIC）が実施している、トリプラ州森林環境改善・貧困削減事業は、住民参加型の植林や生計改善活動等を行うことにより、森林の再生及び地域住民の所得向上が図られ、地域の環境改善及び貧困削減に寄与するものとして計画されています。

トリプラ州においては、住宅建材や工芸品の生産等に竹が広く利用されていますが、森林に大きく依存して生活している貧困層を中心とした住民による森林資源の過剰伐採や焼畑農業等の影響によって、竹林の荒廃が著しい状況にあります。

そこで、日本の竹工芸の技術を活用することによって、付加価値の高い竹製品の生産・販売、及び地域産業としての成長が可能となりうるのか、国際協力銀行からの依頼により、産業技術開発室の中原参事と私とが専門家派遣として、まず現地の状況確認及び大分県における竹材に関する取り組みの紹介を通じた意見交換等を行うため、現地を調査してきたので、その内容を報告します。調査期間は、平成 19 年 8 月 25 日から 9 月 1 日までの 8 日間でした。

### 2. コルカタに向けて出発

8/25、10:30 に福岡空港からシンガポール経由でコルカタ（カルカッタ）に向けて出発しました。15:40 にシンガポールに到着。トランジットで約 5 時間半の待ち時間がありました。搭乗ゲートで国際協力銀行の堀川さんと合流し、ようやく 21:05 にコルカタに向けて出発しました。現地時間の 22:35 に到着。日本時間と 3 時間半の時差があります。コルカタは、インドの 4 大都市の一つのことですが、空港は非常にさびれており、高層ビル等もあまりなく、都会という感じではありませんでした。明朝（8/26）、トリプラに向かうため空港に行くまでの時間にコ

ルカタ市内を観察することができました。竹はいたる所で見ることができ、ビル建設の足場や車道と歩道の境の柵、住宅の塀として利用されていました。

### 3. 目的地トリプラへ

コルカタから目的地のトリプラ州のアガルタラに向けて出発しました。トリプラ州は、インド東部に位置し、人口は約 319 万人、面積は約 1 万平方キロ（大分県の約 1.6 倍）あり、南境・北境・西境の三方面はバングラデシュと面し、東はアッサム州とミゾラム州に面しています。コルカタを離陸後、バングラデシュを横断する形で上空を飛行しますが、バングラデシュは渡航直前に豪雨による水害があり、見渡す限り水没していました。

8/27 の午前中にトリプラ州森林局の幹部 3 名との顔合わせがあり、今回の訪問についての挨拶を交わしました。森林局次長のバフゲーナ氏（Dr.V.K.Bahuguna）によると、トリプラには 19 種類の竹があるが、利用方法が限られており、もっと利用を広げたい、中でもトリプラの竹の 80% を占めるムリ竹（Muli bamboo）の利用方法を検討したいとのことでありました。この竹は資源的には有るが、ほとんど利用されていないので、今回のプロジェクトを期に、竹が産業として成り立つようにすること。そうすることにより、貧困層にも仕事が増え、生活水準が改善されるであろうとのことでした。そのためには、大分の技術が必要であり、協力を依頼されました。

### 4. 現地視察調査

8/27 は、実際にトリプラで行われている竹に関する生産・販売、研究、プランテーション等の現地視察を行いました。ホテルを出ると、我々の乗る車のほかに、軍隊と思われるライフルを持った人達がジープ 2 台に 10 人ほど乗っており、物々しい雰囲気でした。その 2 台のジープが先頭と後方に配置され、護衛されるかたちで現地視察に出発しました。

最初は、トリプラ州直轄の Tripura Bamboo Mission を訪ねました。ここは、竹に関する研究と家具・クラフトの生産及び州外への輸出を主に行っている施設です。トリプラで生産される竹製品の 80% はスティック（線香の芯棒）だそうであり、その他は、家具やクラフト品とのことでした。スティックはあくまでも線香の原料にしかすぎないので、低価格での流通になるため、付加価値の高い製品の開発を望んでいるようでした。

2 番目は民間のハンディクラフトの工場を訪ねました。この工場は、竹ヒゴを機械的に製造しており、機械は台湾製とのことでしたが、日本の装置とまったく同じものでし



写真 1 ビル建設現場（足場に竹が利用されている）

た。竹ヒゴは植物染料で染色しているそうで、赤、黄、青、緑等、鮮やかなものが多く、色落ちもしないとのことでした。そのヒゴを女性の方々が、はた織り機に1本1本通し、ランチョンマットや簾等を生産していました。インドの女性は専業主婦が殆んどのように、女性の雇用機会の増進にも一役担っているようでした。その後、この工場が経営するクラフトショップに行き、トリプラで生産された竹製品を見ることができました。バスケット、小物入れ、置き物等、数多くの品種がありましたが、どれも日本人から見ると古臭い感じがして、民芸風のものばかりで、今から30年ぐらい前の日本といった感じでした。

3番目は、独立行政法人のラバーウッドと竹の家具工場を訪ねました。竹製家具は、丸竹のまま使用したものが多く、表皮は剥いで使用していました。家具を製作する基本的な技術はあるように見受けられ、やはり、クラフト製品と同じようにデザイン性、仕上げの美しさ等、改善の余地が有り、ワンランク上を目指す必要があると感じました。ラバーウッドの工場には、補助金により最新鋭の木工機械が設置されており、まだ設置後、間もないため機械を使いこなせる人がいないようで、技術研修を行うとのことでした。

4番目は、Bamboo Enterprise United(共同企業)を訪ねました。ここも竹製家具を中心とした生産を行っていましたが、デリーのデザイナーの指導による製品開発が行われており、モダンな製品が見受けられました。また、釣竿(丸竹のまま)の出荷もしているようで、真直ぐするために日本と同じように整形作業(カンテキ作業)が行われていました。インドまで来て整形作業が見られるとは予想にもしていなかったので非常に驚きました。

5番目は、HATIPARA Research Stationを訪ねました。ここは、植物に関する研究を行っているところであり、竹のプランテーションも行われており、ここで初めてムリ竹が自生しているところを見ることができました。ムリ竹は、熱帯地方に多く見られる多軸型(株立ち)ではなく単軸型であり、表皮はとても美しくキズも無く、日本のマダケに似た竹でした。なぜ、このムリ竹があまり利用されていないのか不思議なくらいです。



写真2 ムリ竹の自生の状態

## 5. ワークショップの開催

8/28の午前10時から森林局及び各関係機関、竹に関する民間企業等、約50名の方々が集まり、ワークショップが開催されました。この中で、我々の方から事前に準備しておいたパソコンでの説明資料を基に、大分県における「竹資源活用の先進事例紹介」と題し、竹に関する取組みについて説明を行いました。それと、前日の現地視察調査により確認できた内容と今後の課題について報告を行いました。

### ・調査で確認できたこと

- 1.家具の基礎的な製作技術は蓄積されている。
- 2.技術者養成がなされている。
- 3.ムリ竹は単軸型で日本のマダケに似ていた。表皮が美しく艶もあった。

### ・今後の課題

- 1.加工精度の向上
- 2.仕上げ精度の向上
- 3.品質管理の徹底
- 4.ムリ竹の表皮を生かした製品開発  
(油抜き処理の実施)

ワークショップ終了後、バフゲーナ氏との会談では、今回のプロジェクトは始まったばかりであり、一過性のものにならないよう、今後とも協力をお願いしたいとのことでした。近々トリプラから2~3名の調査員を大分に派遣させ、その中で、どのような技術がトリプラに導入できるのかを判断し、今後役に立てたいようでした。



写真3 ワークショップの風景

最後に今回の調査結果について、国際協力銀行のニューデリー事務所に報告に伺い、まず、プレゼンの資料を基に竹に関する基礎的な内容と大分での取組みについて説明をしました。その後、今回の調査によってトリプラの技術レベル等を把握できたこと、それにより今後、竹産業として発展する可能性がある旨の内容を伝え、8日間の調査を終了しました。

(日産工試 大内成司 oouti@oita-ri.go.jp)

## 大分県知的所有権センターと社団法人発明協会

### 大分県産業科学技術センターの知財に係るサポートについて

大分県産業科学技術センターでは、県内中小企業の求めに応じて各種技術支援を行っていますが、その成果によっては、特許権や意匠権等の知的所有権の取得にいたるケースがあります。また、近年の知的所有権に対する意識の高まりから、知的所有権に係るサポートを求めて当センターを訪れる方もたくさんいらっしゃいます。

このような方々を支援するため、当センターでは特許庁の認定を受け、『大分県知的所有権センター』として特許情報の活用や開放特許の流通に係る支援を行っています。また、センター内に社団法人発明協会大分県支部の電子出願相談室も設置されており、電子出願共同利用端末を用いたオンライン出願ができる体制も整っています。

『特許情報活用支援アドバイザー』は、先行技術調査等に必要の特許情報の検索技術や、特許情報の活用に関するアドバイスを行います。先行技術調査は、特許等の出願や研究開発の最初のステップです。具体的なアイデアをお持ちの方はもちろん、新たな事業展開をご検討の方もお気軽にご相談ください。



特許情報活用支援アドバイザー 佐々木俊司

『特許流通アドバイザー』及び『特許流通アシスタントアドバイザー』は、権利化済みの他者の特許を利用したり、又は他者へ供給するお手伝いをします。特許は使われてこそ生きるものです。未利用特許をお持ちの方は是非ご相談ください。また、既存特許の利用は研究開発コスト削減に役立ちます。積極的な利用をお勧めします。



特許流通アドバイザー 加藤賢二



特許流通アシスタントアドバイザー 佐藤孝司

さて、実際に特許等を出願するにはどうしたらよいのでしょうか？現在、特許庁では利便性の向上と事務処理迅速化のための電子特許庁に取り組んでおり、パソコンによる電子出願を受け付けています。共同利用端末を使えば、ご自身で出願が可能です。操作に不明の点があれば発明協会の電子出願アドバイザーがサポートします。



出願アドバイザー  
飯田智恵子



書記  
福田静子

でも、特許の願書を作成するのは難しいんじゃないの？そもそもこんなアイデアで特許が取れるの？そのような疑問をお持ちの方は、大分県、発明協会等が県下各地で開催する無料相談会をご利用ください。現在大分市、別府市、中津市、宇佐市、杵築市、佐伯市、竹田市及び日田市で月1回から週1回開催しています。下記のホームページをご参照の上、ご利用ください。

○大分県知的所有権センターに関すること：

[http://www.oita-ri.go.jp/info\\_data/Chiteki.htm](http://www.oita-ri.go.jp/info_data/Chiteki.htm)

○特許流通促進事業、特許情報活用支援アドバイザー及び特許流通アドバイザーに関すること：

<http://www.ryutu.inpit.go.jp/>

○発明協会大分県支部及び無料相談会に関すること：

<http://www16.ocn.ne.jp/~jiiioita/>

○発明協会に関すること：

<http://www.jiii.or.jp/>

(技術支援担当 河野淳一 kawano@oita-ri.go.jp)

## 平成19年度九州・沖縄地域食品・流通・加工関係研究会の開催

去る10月4～5日、大分市の大分全日空ホテルオアシスタワーで九州・沖縄地域食品・流通・加工関係研究会が開催されました。毎年九州沖縄各県が持ち回りで開催しているもので、今年度は、大分県が開催県となりました。この研究会は、九州沖縄管内試験研究機関の食品関係研究員で構成されている会で、研究及び研究員の資質向上を目的として、試験研究の成果発表を行うとともに、幅広い知識・技術の習得等の研修、情報交換を行っています。

研究会に先立って、各所属の代表者で構成する総会が開催され、会長をつとめる当産業科学技術センター坂下センター長の挨拶に始まり、年間の計画などについて協議が行われました。

当日の研究会では、記念講演として、佐伯市米水津の「(株)高橋水産」社長高橋治人氏に「地場産業活性化、生き残り戦略の軌跡」と題して、講演をしていただきました。

講師の高橋氏については、大学卒業後、大阪魚市場に就職し、その後帰郷して親の跡を継ぎ、水産加工業を始めるようになったそうです。その当時「材料のあるときは加工の仕事はあるが、魚が捕れなくなる時期になると、仕事もなくなる」ことが最大の課題で、家業から企業への転換を目指して高橋氏の挑戦が始まりました。その過程で、流通への疑問、大企業には取り組みできない商品開発、販売戦略等、実に豊富でかつ貴重な経験が続きます。

また、佐伯市米水津では、17の水産加工業者で協業組合を構成していますが、それぞれは互いに競い合い、個々の会社はライバルとして、切磋琢磨し事業を展開「いいものを作るには産地間競争は欠かせない」「互いに手をつなぎ情報を共有しても安易な方向に流れる」等話しておられました。

「最初から地域への貢献など考えていなかった。田舎で生活することを選択した我々には、ただ生き残ることしか残されていなかった。不可能といわれた年間操業、複雑な流通への挑戦。目指したのはひ

たむきな自立への道。人材育成は一村一品運動の原点だった」という熱い思いの講演をしていただきました。最後に研究に対しては、「基礎研究」の大切さを言われ事業を展開していく際に欠かせないものであり研究への期待を述べられました。

次に、各機関より研究成果について報告が行われました。課題を4テーマとし、テーマ1では「栄養、機能性関係」の報告として、長崎県からは「ビワ葉を原料とした茶の機能性について」また、熊本県からは、「県産野菜の調理による機能性成分の変動について」等3課題が発表されました。次に、テーマ2「ポリフェノール関係」では、宮崎県より「ゴボウ加工時のクロロゲン酸について」沖縄から「サトウキビのポリフェノールについて」は九州沖縄農業研究センターからは、「サツマイモ葉のポリフェノールについて」報告がありました。休憩を挟んで、テーマ3の「加工適性、加工技術」では、センター廣瀬主幹研究員が、「カボス搾汁方法と果汁品質について」研究成果を発表しました。カボス果汁製品は、味・香り・外観等の点で改善が求められていることから、味、香りが良好で高品質なカボス果汁を製造するための搾汁法についての報告をしました。

最後にテーマ4の「水産流通・加工関係」では、大分県農林水産研究センター水産試験場の斉藤義昭研究員が、「養殖ブリ未利用部の利用法について」と題して佐伯地域の郷土料理で使われているごまだし製造について研究の報告を行いました。加工の際の廃棄物となる“あら”や中落ちなどの資源化について報告しました。今後、保存性や特性を活かした使用法の開発について課題を残しているとのこと。夜の交流会でごまだしうどんの試食品を提供し、参加者に味わってもらいましたが、初めて口にする人たちは、新しい調味料として関心を示していました。

いずれの発表も大変興味深いもので、互いの研究発表に対し熱心な質疑応答が繰り返されていました。

翌日は、現地検討会、古くから醸造業が盛んな臼

杵市に向かい、市内の二豊味噌協業組合味噌工場とフンドーキンドレッシング工場で研修を行いました。

二豊味噌協業組合味噌工場は、昭和48年富士甚醤油株式会社を中心に県下33の味噌製造業者が協同して完成した工場で、廃棄物の減量化にも積極的に取り組まれています。また、フンドーキンドレッシング工場は、最新式工場で、特に材料へのこだわり、消費者ニーズに対応する製品づくりを目指している等、それぞれに特徴ある製品づくりに取り組む工場を視察させていただきました。

消費者の安心・安全意識が高まる中、衛生管理・商品管理の徹底、また、消費者ニーズ対応の新たな商品づくり等に取り組む厳しい姿勢を感じながら、現地検討会を終了しました。

来年は、宮崎での開催が予定されており、企業ニーズに対応する、さらなる研究を進めることを再確認し研究会を終了しました。

末尾になりましたが、この研究会開催にご協力いただいた関係機関・企業の皆様に心からお礼申し上げます。

(食品産業担当 安藤美江 ando@oita-ri.go.jp)



## 本報告

## 科学技術フェア2007の開催

青少年の科学の心の育成を目的として、11月18日(日)に2007 科学技術フェアを開催しました。

参加の対象は、県内の小学生4、5、6年生で応募のあった中から抽選により選ばれた320名(保護者を含む来場者数574名)が参加しました。

今年は、体験・参加型のイベントとして11の体験教室を行い、それぞれの教室で「しくみ」の説明を受けたり、工作や実験などにより、科学技術に触れる機会を満喫しているようでした。

(技術支援担当 佐藤哲哉 satotetu@oita-ri.go.jp)

- A. 絵文字で遊ぼう!
- B. 竹と和紙でマイ時計をつくらう!!
- C. 強力な電磁石はどうやったらできるかな?
- D. オリジナルスーパーボールを作って記録に挑戦しよう。
- E. どうやったら入るのかな? キューピットの矢
- F. たたいて、みがいて、キーホルダーを作ろう!!
- G. コップスピーカー・モータをつくってみよう!
- H. 電子顕微鏡でのぞいてみよう! ミクロの世界!
- I. 手作りバターに挑戦!
- J. いろいろな食べ物で染めてみよう!
- K. 家族で作ろう円形木琴、くふうが奏でるステキな音色!!



オリジナルスーパーボールを作って記録に挑戦しよう



竹と和紙でマイ時計をつくらう

## 事業報告

# 「県政ふれあいトーク」(竹工芸従事関係者)

竹工芸・訓練支援センターにおいて、10月2日(火)に県政ふれあいトークが開催され、知事および県議会議員2名、そしてBAICA(バイカ)・海外展開研究会・巧匠竹学会の3研究会のメンバー、別府竹製品協同組合の理事長と専務理事など12名、合計15名が参加されました。

大分県を代表する伝統的工芸品「別府竹細工」を産業として振興させるために様々なチャレンジに取り組む竹工芸従事者の皆さんを、知事自ら「竹のエコロジカルな点も評価できるし、別府竹工芸の今後が楽しみで、海外への展開も期待している。」など激励しました。

また、県議会内でも、大分ブランド推進特別委員会を設置し、県産ブランドの振興を図ることとしており、この中に別府竹細工を入れ答申を出す予定があるなど、県議会も応援しているという、県議会議員のみなさんから思いがけない激励もいただいて、たいへん盛り上がった懇談会となりました。



(竹工芸センター 坂本 晃 sakamoto@oita-ri.go.jp)

## 事業紹介

# 次世代電磁力応用機器開発拠点の構築に向けて

— 大分県地域結集型研究開発プログラムが採択 —

大分県から提案応募した「次世代電磁力応用機器開発技術の構築」が科学技術振興機構(JST)の地域結集型研究開発プログラムの平成19年度新規課題として採択されました。事業期間は平成20年1月1日から平成25年3月31日の予定で、予算規模は全期間で約23億円と見込まれています。

本プログラムでは、大分大学を中心とした県内外の大学等(大分高専、当センター等8機関)の電磁力応用技術シーズを発展させ、その成果を活用して参加企業((株)安川電機、(株)石井工作研究所等県内外の企業9社)の企業ニーズの解決を図ることを通じて、本県における電磁力応用機器の開発拠点、産業の創出を目指します。

研究内容は、大分大学榎園研究室の持つ独自技術であるベクトル磁気特性理論に基づき、新しい材料活用設計技術を発展させ、電磁力応用機器開発のための次世代技術を確立し、電磁力応用機器開発支援拠点を構築し、新技術・新産業の創出を図ることを目的としています。また、中核機関は(財)大分県産業創造機構で、コア研究室、サブコア研究室をそれぞれ大分県産業科学技術センター、大分大学に設置します。研究開発テーマは次のとおりです。

- テーマⅠ モータの高効率高出力化
  - ① 産業用ロボット用モータの低慣性化
  - ② 産業・家電用モータの高速回転化
- テーマⅡ 磁気駆動伝達要素の高機能化
  - ① 磁気カップリング、磁気歯車の高機能化
  - ② 車用シートの磁気バネ・磁気ダンパーの高機能化
  - ③ リニアアクチュエータの高速・高出力化
- テーマⅢ 材料活用支援技術の構築
  - ① 高出力電磁力応用機器用高耐圧電線の開発
  - ② 極小局所ベクトル磁気特性プローブの開発
  - ③ 応用ベクトル磁気特性技術の構築
  - ④ ハイブリッドコンピューティングシステムの構築

本県では、「おおいた産業活力創造戦略」のもとに、21世紀型の産業集積に向けたものづくり産業の振興を進めています。特に、半導体や自動車産業など先端ものづくり産業を、県経済を牽引する産業と位置づけており、これらの高度加工組立型産業を支える高機能部品や部材の製造供給拠点、研究開発拠点づくりに力を注いでいます。その中で、モータの小型化や高出力化などの次世代電磁力応用機器開発技術の構築、さらには技術支援拠点の構築は本県産業政策の核となり得るものです。

(機械・金属担当鶴岡一廣 turuoka@oita-ri.go.jp)